

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月13日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520410

研究課題名（和文） 英語・日本語・中間言語スピーチアクト・コーパスの構築と、その英語教育への応用

研究課題名（英文） The Compilation of the Corpora of Speech Acts in English, Japanese and Interlanguage English, with their Applications for English Language Teaching

研究代表者

鈴木 利彦（SUZUKI TOSHIHIKO）

早稲田大学・商学大学院・准教授

研究者番号：40433792

研究成果の概要（和文）：

[I]英語母語話者が用いるスピーチアクト遂行のための語彙、文法、会話レベルの方策の研究を進め、[II]日本の英語教育に応用するための教材と教授法の研究・開発、そして本テーマに関する中高英語教員の現状と意識の調査を行い、[III]大学英語教材と既存の英語コーパスでのスピーチアクトの扱いに関して研究を実施し、[IV]日本人の英語（中間言語）スピーチアクト遂行能力の調査を[II]に付随する形で実施し、[V]日本語スピーチアクトに関してデータを収集し、その特徴を解明するための研究を行った。

研究成果の概要（英文）：

This research project has produced achievements in the following areas: [I] Investigation on the linguistic strategies employed by native English speakers at the lexical, grammatical, and discourse levels; [II] Experimentation with teaching materials and teaching methods for the application of the research results, along with a survey of the status quo and the future directions of this theme at the secondary level ELT; [III] Research on the treatment of speech acts in the university ELT materials and the existing large-scale English corpora; [IV] Survey of the ability of the Japanese learners to perform the target speech acts using interlanguage English; [V] Study on speech acts in Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 平成22年度 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |
| 平成23年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 平成24年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,100,000 | 930,000 | 4,030,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：①語用論、②英語スピーチアクト、③英語教育、④中間言語スピーチアクト、⑤日本語スピーチアクト

1. 研究開始当初の背景

「スピーチアクト(Speech act=発話行為)」

の概念は、語用論の根幹をなすテーマの一つであり、具体的には Thanking（感謝）、

Apologizing (謝罪)、Requesting (依頼)、Inviting (招待) など、「言語である特定の行為を行う」または「話者の意図や感情を伝える」ことを指している。この分野の発端として、Austin が言語においては発話者の意図を実現させるために使用される場合があることに着目し、「遂行動詞」という概念からこの分野の研究の端を開いた。それを受け継いだ Searle は「スピーチアクト」という概念を用いてその理論体系と研究を発展させた。

「コーパス」は、言語の特徴を量的・質的に研究する目的や、英語辞書などで活用する目的のために構築された大規模な言語データベースを指し、代表的な英語コーパスとしては BNC (the British National Corpus) 等が挙げられる。語用論研究でもコーパス・データの使用が盛んになってきており、実際の言語使用のデータに基づいた発話行為やポライトネス研究の重要性が広く認識され始めている。

外国語教育に於ける「語用論的能力」(ある特定の状況に於いて文脈に応じた言語の理解や使用ができる能力) は、コミュニケーション能力の養成を主眼とする CLT (=Communicative Language Teaching) において重要な要素になってきている。外国語では、特定の場面に於ける語彙、文法、会話ストラテジーを実例に触れることなしに学習することは不可能であり、この分野に関連した教材・教授法の開発は今後の大きな課題である。

また、外国語に於ける「語用論的能力」の育成に関連して、日本人学習者の中間言語(英語)でのスピーチアクト遂行能力の検証と、異言語・異文化間のスピーチアクトの類似・相違点を明らかにするために母語(日本語)に於けるスピーチアクト遂行の方策を解明すること、の二つの必要性が国内外で広く認識されており、最近の大きな研究テーマとして追求されている。

本研究は、研究代表者の科研費出版(2006年度、研究成果公開促進費<研究課題番号 185086>「A Pragmatic Approach to the Generation and Gender Gap in Japanese Politeness Strategies」)、科研費研究(2006-2007年度、若手研究[スタートアップ]<研究課題番号 18820028>:「英語スピーチアクトコーパスの構築と大学英語教育に於けるその活用」)及び、早稲田大学特定課題研究(2008年度、<課題番号 2008A-840>:「英語スピーチアクトコーパスの構築と分析: 会話ストラテジーの研究・教授法開発」)、「成人(ビジネス)英語・児童英語・総合英語スピーチアクトコーパスの構築と分析研究」(2009年度、<課題番号 2009B-083>)に関する研究発表や論文執筆を通して、この研究プロジェクトを更に発展させて言語学研究

と日本の英語教育により大きな貢献をする必要性を強く感じ、新たに英語教材研究や中間言語・日本語を研究対象に含めた今回の研究計画を開始するに至った。

2. 研究の目的

[I]スピーチアクトに於いて英語母語話者が用いる語彙、文法、会話レベルでの方策の研究:「児童部門」、「青年部門」、「成人部門」でデータベースを拡大しコーパス分析を行い、各部門で設定した対象スピーチアクトで特徴的な語彙の使い方、特定の構造の出現頻度、個々の会話ストラテジーとその組み合わせ、付随するポライトネス・ストラテジーなどを解明する。

[II]日本の英語教育に応用するための教材と教授法の研究・開発: 英語スピーチアクト学習を通じた語用論的能力の養成のためにはどのような教材・教授法が有効であるかを、実際にそれらを用いて授業を実施し効果測定を行うことによって明らかにする。さらにこのテーマに付随して現職の中高教員が「語用論的能力の育成」に関しどのように現状を認識し、そして今後の方向性を考えているかを明らかにし、課題の発見に努める。また、昨今盛んに実施されている、英語を使用したサイバー国際交流においても「スピーチアクト」というテーマをどのように扱うべきかの研究を行う。

[III]国内外の英語教材や既存の英語コーパスでのスピーチアクトの扱いに関する調査: 国内外で出版されている英語教材と既存の英語コーパスのデータを集め、それらに於けるスピーチアクトの扱いと本研究データベースとの類似・相違点を明らかにする。

[IV]日本人の英語(中間言語)スピーチアクト遂行能力の調査: 日本人英語学習者が、中間言語としての英語でどの程度スピーチアクト遂行のための語用論的能力を有しているかを、語彙・文法・会話レベルで明らかにする。

[V]日本語スピーチアクトに関する研究: スピーチアクトに関する異言語・異文化間の類似・相違点を調べるために、日本語スピーチアクトで用いられる語彙・文法・会話の各レベルの遂行ストラテジーを明らかにする。

3. 研究の方法

[I]英語スピーチアクト・コーパス拡充のため、英語圏の国々を中心として、DCT (=Discourse Completion Test)を通じて基本データを、ロールプレイを用いて映像と音声のデータを収集する。収集したデータは、コーパス研究用ソフトウェア(WordSmithなど)を用いて語彙・文法レベルの分析を、会話レベルはExcel等でsemantic tagging(意味論的タグ付け)を行い分析する。[II]大学の英

語授業を中心として英語スピーチアクト学習プロジェクトを実施し効果測定を行う。また、サイバー国際交流を行っている授業でスピーチアクトとポライトネスに関するトピックを扱い、参加者がどれだけこのテーマを扱えるか、またどのような事前学習をすればこのテーマをより良く話し合えるかを音声／テキストデータの分析を中心にして明らかにする。この分野の中等教育における教育の現状と課題を明らかにするために現職中高教員にアンケート調査を実施する。[III]国内外の英語教材と既存の英語コーパスの関連データを収集し、その中でのスピーチアクトの扱いを研究する。更に、主に大学生を対象とした英語スピーチアクト学習プロジェクトに付随する形で、[IV]中間言語スピーチアクトと、[V]日本語スピーチアクトのデータを収集し、英語スピーチアクトと同様の手法で分析し、英語・中間言語・日本語の関係を究明する。

4. 研究成果

[I]スピーチアクトに於いて英語母語話者が用いる語彙、文法、会話レベルでの方策の研究

「青年部門」と「成人部門」に関し、それぞれデータを拡充し分析を進めると共に、Invite (招待) のスピーチアクトにおいて<米国 Casual>、<米国 Polite>、<英国 Casual>、<英国 Polite>の4つのカテゴリーを<日本 Casual>、<日本 Polite>と合わせて比較し次の各テーマに関してそれぞれの特徴を明らかにした：(1) “Polite”と“Casual”な発話行為遂方法の比較、(2) 「社会指標マーカー」(social index markers (vocatives, interjections, etc.))と「敬意マーカー」(deference markers (honorifics))の有無または使用方法の比較、(3) 意味内容 (propositional contents) によるポライトネス操作のためのストラテジー比較。結果として、Polite (米・英データ) ではより間接表現が使われること、Casual 英語では Positive politeness strategies (Brown & Levinson, 1987) が、Polite 日本語では Negative politeness strategies がより高い頻度で使用されていることが判明した。

「児童部門」に関しては、米国サンフランシスコの6名の小学生 (8~10歳) を対象に(1)Compliment (賛辞)、(2)Request (依頼)、(3)Thank (感謝)、(4)Invite (招待)、(5)Apologize (謝罪)、(6)Comfort (慰め)の6つのスピーチアクトについて調査 (音声データ収集) とデータ分析を行った。その結果、青年・成人のデータと比較すると言語使用ストラテジーの巧みさや緻密さに欠けるものの、基本的な言語ストラテジーは踏襲されており、この年齢層でも英語ネイティブとして

これら6種類のスピーチアクトを遂行することができることが証明された。分析結果で明らかになったこれら児童の語彙、文法、言語ポライトネスストラテジーは日本の初等英語教育での教材作成に有用であると考えられる。

研究最終年度には総括的な取り組みとして、Thank、Apologize、Request、Inviteの4つの英語スピーチアクトに関し、日本国内の英語学習者が効果的にストラテジーを学ぶことが可能な図書を刊行した。

[II]日本の英語教育に応用するための教材と教授法の研究・開発、ならびに[IV]日本人の英語 (中間言語) スピーチアクト遂行能力の調査

英語コミュニケーション教育に関する大学の授業において、「英語スピーチアクト・コーパス」の中から「招待・勧誘 (Invitation)」、「提案 (Suggestion)」、「依頼 (Request)」を選択し、コーパスデータの観察、ディスカッション、ロールプレイなど様々な手法を組み合わせた指導を行った。その結果、指導前は限られた文法形式を用いた表現しか産出することのできなかった受講生が多様な言い回しを用いられるようになるとともに、対人関係に配慮しながら発話行為を実践するという、コミュニケーションの語用論的適切さに対する意識の高まりが見られるなど、学習者の英語運用能力向上に貢献することができた。

さらに別の大学の英語の授業において2010年度に「提案」のスピーチ・アクトに焦点を絞って指導するプロジェクトを実施し、学生が使用できるポライトネス・ストラテジーがどのように変化するかを調査した。その結果、指導直後には「格下げ (downgrader)」を使用した表現が増え、SAC (スピーチアクト・コーパス) に近づくような効果が得られた。しかしながら、「Let's」や「Shall we」のような表現は減ることがない、設問の内容によるバイアスの可能性が考えられる、多肢選択式の効果測定では天井効果も見られたなど、いくつかの問題点も明らかになった。

2011年度と12年度の研究では、10年度の研究の問題点を改善した上で、ポライトネスとスピーチアクトの全般的な指導が、明示的な指導をしたスピーチアクトとしないスピーチアクトの表現能力にどのような影響を与えるかを調査した。それぞれの年度の前期を明示的指導期間、後期を暗示的活動期間とし、前者では主にポライトネスとスピーチアクトの直接的・実践的な指導を実施、後者では主に議論と寸劇の実演を通して英語を書き、話すことを目的とした活動を実施した。その結果、明示的指導直後では明示的指導を行ったスピーチアクト (褒める、提案する、

苦情を言う)と行わなかったスピーチアクト(謝る)のいずれも、指導前より表現が豊かになったことが確認された。ポライトネスに加え、スピーチアクトを明示的に指導することで、明示的な指導をしないスピーチアクトの産出能力も向上する可能性が示唆されたと言える。しかしながら、これらのスピーチアクトについては語彙数やポライトネス・ストラテジーの使用において、指導前に近い状態に戻ってしまうものもあった(褒める、苦情を言う、謝る)。今後は、明示的指導をするスピーチアクトと暗示的活動の中心とするスピーチアクトの組み合わせを変えて検証し、最小限の指導で最大限の応用力が引き出せるようになる組み合わせを探っていく必要がある。

2012年度春学期に行われた日本と台湾の大学生の間のサイバー交流(ビデオ/テキスト・チャット)の中でスピーチアクトを取り扱った回の交流(1. Thanking & Apologizing, 2. Requesting & Inviting)の音声データ分析を実施した。その結果、(1)英語を使用した交流であるが、英語の表現に関してではなくお互いの母国語(日本語、中国語)でどのようにこれらの発話行為を行うかを中心に話を進められた、(2)Thank や Apologize のように代表的な定型表現(Thank you, I'm sorry)などに相当する日本語・中国語)に関してはディスカッションができるが、それらがないRequest や Invite に関しては議論が難しい、(3)ある程度言語の構造や意味内容、文化的な背景を説明できる言語学的な素養なしにはこれらのトピックを話し合うことは難しい、(4)基本的な問題として、「招待」や「依頼」などの発話行為はそもそもどのようなものであるかを理解していない学生もいる、という事が判明し、準備段階でこれらに関する事前学習が必要であることが分かった。今回の調査によって、国際交流における「スピーチアクトとポライトネス」教育のために貴重な今後の指針を得ることができた。

「外国語(英語)における語用論的能力の育成」というテーマに関し、2011、2012年の2年間にわたり、実際に教育現場で指導に当たる教師の現状認識と今後の方向性を明らかにする目的で、現職、または最近まで現職であった中高英語教師28名に記述式のアンケート調査を実施した調査のテーマは次のとおりである:(1)「語用論」という分野について、(2)英語スピーチアクトについて、(3)言語におけるポライトネスについて、(4)学習指導要領における「語用論的要素」の取り扱いについて、(5)「語用論的能力」の育成について、(6)その他。分析の結果、調査項目全般を通じて、(a)「最近必要性を感じている分野であり、コミュニケーション能力の育成のためには必須の分野である」、(b)「自分自身が

学んだことがないので、適切な教材や研修などが必要である」、(c)現在の指導要領には具体的な指導方法が記載されておらず、また大学受験などの準備に迫られていてこの分野に力を入れることは難しい、といった中高の教育現場からの意見や考察を得ることができた。

III 国内外の英語教材や既存の英語コーパスでのスピーチアクトの扱いに関する調査

大学英語教材に出てくる代表的なスピーチアクトの表現をデータベース化し、それらのうち、Suggesting, Requesting に焦点を当て、本研究のコーパスと比較し、その差を調査した。データを取得した英語教材は、コミュニケーション能力養成を趣旨としたものばかり計15冊で、国内外の主な大手出版社のものを、ある出版社の教材に偏ることなく、満遍なく選んで調査に使用した。

さらに過去10年間におけるセンター試験(英語)に出てきたSuggesting, Requestingの表現も抽出してデータベース化し、比較対象とした。その結果、大学英語教材およびセンター試験における各スピーチアクト表現の頻度と、本研究プロジェクトのSACデータ中のネイティブスピーカーの使用するスピーチアクト表現の頻度との間に、大きなズレが生じていることが分かった。

その一方で、英語教材の中でもスピーチアクトの概念を強く意識して作成されている教材に関しては、各表現の頻度において本研究のコーパスに多少近い傾向が見て取れた。また、教材を場面設定に従って、海外旅行先、ビジネスの場、日常生活の3通りに分けて分析したところ、日常生活を扱った教材に出てくるスピーチアクトの各表現の頻度が、最も本研究のコーパスと近似している結果が現れた。2012年度には二人の英語ネイティブスピーカー講師の協力を得、大学英語教材に出てくる表現のポライトネスのレベルの適正度も調査した。それにより、コミュニケーション能力養成を趣旨とした教材においては、ポライトネスの点でほぼ状況に応じた表現を織り込んではいないものの、まだ改善の余地が残されていることが分かった。この調査を通し、実態に即したスピーチアクト表現をより適切に教材に織り込んでいくためのデータベースとして、スピーチアクト・コーパスを大学教材の改善・発展のために有効活用していく意義と必要性が確認された。

既存の英語コーパスでのスピーチアクトの扱いに関する調査として、総計1億語のデータベースからなるBNC(= The British National Corpus)を使用して、Invite(招待)とSuggest(提案・提言)の2種類のスピーチアクトについて調査を行った。今までの本研究プロジェクトの調査結果から基本的な

定型表現として使用されていることが判明している、“would you like to come”、“do you want to come”、“you should come” (Invite) と“maybe you should”、“why don’t we/you” (Suggest)のそれぞれにつき BNC での使用状況の分析を行った結果、“maybe you should”のみ大多数が「提案・提言」の発話行為で使用されている以外はほとんど出現しないか出現しても別の発話行為として使用されていることが判明した。このテーマに関してはさらに詳細な調査が必要であるが、「英語スピーチアクト研究」では既存の英語コーパスを使用する以前に本研究プロジェクトのような目的に沿ったコーパスを作成しデータを分析して言語使用の傾向を把握し、それを踏まえてこれら既存の英語コーパスを使用して実生活での英語スピーチアクト遂行の実態を研究することが望ましいという事が浮かび上がってきた。

[V]日本語スピーチアクトに関する研究

日本語スピーチアクトコーパスに関しては、日本語母語話者から集めたデータをデジタル化し、分析を進めた。特に「依頼」に関しては、形態素分析ソフトやコンコーダンスーを用いて詳細な検証を行い、語彙リストの作成や談話ストラテジー分析を通じて、日本語依頼表現の特性を探った。その結果、特に目下から目上の人物に向けられる発話の語彙的特徴（丁寧語や言いさし表現の多用、語彙的格下げ）およびストラテジー上の特徴（謝罪の多用）が顕著に観察され、日本語母語話者が相手との社会的関係を意識しながら語彙およびストラテジーの内容や順序を巧みに使い分けている様子が明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

①鈴木利彦、Teaching English Speech Acts with the Utilization of Corpus Data: A trial for more communicative ELT, 2010 KETA Joint Conference & ETAK International Conference、査読無、2010、122-126

②鈴木利彦、今後の英語教育に於ける言語機能の指導：英語スピーチアクト・コーパスからみえてくるもの、KATE（関東甲信越英語教育学会）Newsletter No.92、査読無、2010、15-16

③林淑璋、鈴木利彦、日台大学生電子掲示板交流における発話行為とポライトネス・ストラテジーの研究、2010 世界日語教育大会論文集・予稿集、査読無、2010、CD

④水島梨紗、「英語スピーチアクトコーパス」の応用可能性と大学英語クラスにおける実践指導の試み、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集、査読無、6巻、2010、19-29、
http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/42871/1/Sau6_002.pdf

⑤鈴木利彦、Children’s pragmatic competence: A case study of English speech acts performed by American children, The Cultural Review (Waseda Commercial Studies Association)、査読無、Vol. 38、2011、55-73

⑥水島梨紗、「提案 (Suggestion)」に関する英語産出能力のための事例研究：「英語スピーチアクトコーパス」を活用した実践指導例、札幌学院大学人文学会紀要、査読無、89巻、2011、71-86
<http://sgulrep.sgu.ac.jp/dspace/bitstream/10742/1431/1/JB-89-071.pdf>

⑦新井巧磨、無標ポライトネスの再定義、英語英文学叢誌、査読有、第40号、2011、7-21

⑧辻建一、大学英語教材に出てくる「提案」「依頼」のスピーチアクト表現の、コーパスに基づいた分析、星稜論苑（星稜女子短期大学紀要）、査読無、第40号、2012、25-35

⑨新井巧磨、「提案 (suggest)」に関するスピーチ・アクトの実践指導例：明示的指導と暗示的指導の比較、東京国際大学論叢言語コミュニケーション学部編、査読無、第8号、2012、37-48

⑩水島梨紗、日本人 EFL 学習者による発話行為「招待・勧誘 (Invitation)」の習得について：大学英語クラスにおける協同学習の取り組みと効果の検証、札幌学院大学人文学会紀要、査読有、91巻、2012、85-98、
<http://sgulrep.sgu.ac.jp/dspace/bitstream/10742/1534/1/JB-91-085.pdf>

⑪辻建一、大学英語テキストに出てくるスピーチアクト表現の適切さの検証、星稜論苑（星稜女子短期大学紀要）、査読無、第41号、2013、21-29

⑫鈴木利彦、A Trial to Activate the Learning of Speech Acts and Politeness in the Cyber Cross-Cultural Communication: An Intersection of Japanese and Chinese through English, The Cultural Review (Waseda Commercial Studies Association)、

査読無、Vol.41/42、2013、91-113

〔学会発表〕(計10件)

①鈴木利彦、Teaching English Speech Acts with the Utilization of Corpus Data: A trial for more communicative ELT、The English Teachers Associations in Korea (ETAK) 2010 International Conference、2010年6月12日、韓国・Kongju National University

②林淑璋、鈴木利彦、日台大学生電子掲示板交流における発話行為とポライトネス・ストラテジーの研究、2010世界日語教育大会、2010年7月31日、台湾、台湾政治大学

③鈴木利彦、Children's pragmatic competence: A case study of English speech acts performed by American children、JACET Summer Seminar 2010 at Kusatsu、2010年8月24日、草津セミナーハウス

④鈴木利彦、Reconsideration of politeness framework through a study of "inviting" in Japanese and English: the missing link between pragmatic and sociolinguistic values、International Pragmatics Association (IPrA) 2011 Conference、2011年7月7日、英国 University of Manchester

⑤鈴木利彦、水島梨紗、辻建一、豊田春賀、小田節子、「英語スピーチアクト・コーパス」を活用した、語用論的能力養成の試み、第50回(2011年度)JACET全国大会、2011年9月2日、西南学院大学

⑥鈴木利彦、Speech acts and politeness in the secondary TEFL in Japan、IATEFL Annual Conference & Exhibition - Glasgow、March 2012、2012年3月20日、英国 Scottish Exhibition and Conference Centre

⑦新井巧磨、ポライトネスの実践的指導による表現の変化、日本英語表現学会、2012年6月16日、早稲田大学

⑧水島梨紗、「英語スピーチアクトコーパス」を活用したプロダクティブ・スキル育成の試み、日本コミュニケーション学会北海道支部大会、2012年10月10日、札幌市立大学サテライトキャンパス

⑨鈴木利彦、「語用論的能力」育成に関する教師の認識の考察、JACET 言語教師認知研究会、2012年11月24日、立教大学

⑩鈴木利彦、A Comparative Study of the

Corpora for General and Specific Purposes for a Pragmatic Study、日本語用論学会第15回大会、2012年12月1日、大阪学院大学

〔図書〕(計2件)

①鈴木利彦、南雲堂出版、はじめての英語スピーチアクト、2012、197

②佐藤俊一、名塩征史、水島梨紗、自費出版、「日本語スピーチアクトコーパス」を活用した依頼表現のデータ分析、2013、48

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 利彦 (SUZUKI TOSHIHIKO)
早稲田大学・商学学術院・准教授
研究者番号：40433792

(2) 研究分担者

水島 梨紗 (MIZUSHIMA LISA)
札幌学院大学・人文学部・英語英米文学科・講師
研究者番号：00572421

辻 建一 (TSUJI KENICHI)
金沢星稜大学女子短期大学部・准教授
研究者番号：50352802

(3) 連携研究者：なし

()

研究者番号：